Textbook of Architecture
for the People

「建築学」の教科書

安藤忠雄 ANDO Tadao
石山修武 ISHIYAMA Osamu
木下直之 KINOSHITA Naoyuki
佐々木睦朗 SASAKI Mutsuro
水津牧子 SUITSU Makiko
鈴木博之 SUZUKI Hiroyuki
妹島和世 SEJIMA Kazuyo
田辺新一 TANABE Shinichi
内藤廣 NAITO Hiroshi
西澤英和 NISHIZAWA Hidekazu
藤森照信 FUJIMORI Terunobu
松村秀一 MATSUMURA Shuichi
松山巖 MATSUYAMA Iwao
山岸常人 YAMAGISHI Tsuneto

これがケンチクだ!

読み出したらやめられない。
建築をめぐる14の醍醐味。
中学生からお年寄りまで楽しく読める!!

読む・見る・学ぶ

はじめに◎教科書にないもうひとつのドラマ

建築の教科書とはいうものの、この本は試験問題を解くための教科書ではない。

「建築には、正しい答えがひとつあるというものではない」ということを知ってもらうための教科書である。

また、建築の勉強の仕方も、ひとつだけではないことを知ってもらうための教科書でもある。

だいいち、建築の勉強といっても「建築を設計する勉強」「建築を建てる勉強」「建築を建てさせるための勉強」「建築を使う勉強」「建築を見る勉強」「建築を書く勉強」「建築を描く勉強」「建築を直す勉強」「建築を壊す勉強」「建築を残す勉強」などなど、数えきれないくらい勉強の仕方もあるので、何を勉強すればよいのかもひとつではない。

建築についての勉強は年齢や経験とは関係なく、誰でもすべきものだし、誰でもできるものだ。しかしその手がかりはどうすれば得られるのだろう。いろいろな角度から建築については考えられるのだし、いろいろな角度から建築ははじめられるのだから。

そうなると建築にいろいろなかたちでかかわっている人々の話を聞くことが大切になる。ここにはそうした「答えのない」建築の話が詰まっている。けれどもこの本のなかで建築を語っているのは、現在のわが国の建築をもっともエキサイティングにしている人々ばかりだ。この

本を編集してみて、よくもまあ多様な、そして多用な人々がここに建築を語ってくれたものだという気がしている。みんな、建築について自分が語りたいと思ったことを語ってくれた。どれもこれも建築そのものの話なのだけれど、ひとつとして同じ話はない。話に応じて建築も千変万化の顔を見せる。しかしながらただひとつ共通しているのは、みな「建築はどんな角度から見ても面白い」「建築ははてしない可能性をもっている」と語っていることだ。そこには専門の種類、経験の幅や立場の違いを越えた共通性がある。なぜなのかを考えてみると、最初に言った「建築はひとつの答えをもつものではない」という言葉に戻ってくるのに気づく。

答えがひとつでないからこそ建築は面白いのだし、だからこそ建築には無限の可能性があると感じられるのだ。一人一人が建築について考えて、一人一人にその答えと可能性を感じられるからこそ、建築はつくられつづけるのだし、評価されるのだし、歴史となり文化ともなるのだ。だからこそ、ここでみんなが建築について語っているのだ。

われわれは建築に取り囲まれて暮らし、建築を眺めながら旅し、建築の中で仕事をし、考えごとをし、建築の中で死んでゆくのだ。われわれは建築から逃れようと思っても逃れられないのだ。だからこそわれわれすべてに建築はかかわっているのだ。だったら、われわれ全員、建築について勉強する必要があると思うのだ。この本はそのためのひとつの手がかりを与えられればよいと思ってつくられている。ぜひとも建築というものを考えてみてほしい。

日本の建築は世界一流だといわれるのに、日本の都市は見事だとも美しいとも言われない。

これはなぜなのだろう。その理由を考えるためにも、われわれみんなが建築について考えてみるべきではないのだろうか。建築は一つ一つが孤立して立っているわけではないし、建築が集まるところに生まれる都市は、建築との境目がない存在なのだ。だから建築は、決して建てたり建てさせたりする人々だけのものではないのだ。建築に取り囲まれ、建築を取り巻いている人々すべてにとって大切なものであり、面白いものなのだ。みんなが建築について考えれば考えるほど、建築だけではなく、都市も美しくなってゆくと思う。そのためにこの本がひとつのきっかけとなればよいと思っている。

二〇〇三年五月

東京大学教授・鈴木博之

「建築学」の教科書◉目次

はじめに　教科書にないもうひとつのドラマ　鈴木博之——3

Lesson I　朝の授業

建築と出会う　揺れ動く心　安藤忠雄——9

建築は美しい　技術と芸術の融合　佐々木睦朗——27

建築を結ぶ　人間のもつ豊かさの多様な発露としての建築　松村秀一——53

建築は広い　密林の奥には何がある　内藤廣——71

Lesson II　昼の授業

建築はしぶとい　建築の強さについて　鈴木博之——91

建築を感じる　小さき場のために　松山巖——111

建築は大変だ　建築家という職業　妹島和世——147

建築はかよわい　自然の力は偉大なり　水津牧子——159

建築が青になる　シックハウス問題　田辺新一——177

Lesson III　夜の授業

建築を探る　謎のお雇い建築家　藤森照信——203

建築に刃向かう　歴史を見直す、歴史から見直す　山岸常人——225

建築は直せる　技と心と心意気　西澤英和——249

建築はあやしい　お城も宮殿も原爆ドームも　木下直之——265

建築と闘う　スノビストに毒だみ茶を　石山修武——289

図版・写真出典——303

場所が、小さな細部が大事にされなければ巨大な建築は単なる巨大なものとなる。巨大さを感じさせるには、むしろ小さな場所や細部を重視しなければならない。巨大な建築も小さな場や細部が積み上げられて生まれる。小さな細部について熟考したときに、ほんとうに新鮮な建築がつくられるだろう。多くの人々が手がけた建築の細部にこそ、その経験の核は蓄えられる。

40

いま一度、あなたが気持ちのよいと思い、好きだなと思う場所を考えてみよう。それはあなたが発見した場所だ。

建築をつくる人たち、街をつくる人たちがほんとうに希むことは、建築を使う人たち、街を使う人たちが、自分が携わった建築や街のなかに喜びを共有する場を発見してくれることだ。建築は希望という未来へのエキスを一滴注ぎ込むことにより、建築となる。それは小さな場であってよい。たとえその建築が巨大で、高層であろうとも小さな場をないがしろにした建築は、未来の使い手に拒絶されるだろう。未来のためにつくられた小さき場こそ、建築にいま必要なエキスの一滴なのだ。それはいつか未来のあなたたちにもう一度発見されることを希んでいる。

まつやま・いわお／作家・評論家

●――建築は大変だ

建築家という職業

妹島和世

建築家という職業についての説明のために、たとえば私がどのような生活を送っているかここで書くことになりました。建築家と言ってもたくさんの人がいますから、その分だけさまざまな建築家像があると思います。ですから私がこれから書くことは一般的でないことも含まれていると思います。ただ、大雑把には、大きな組織に属する建築家とアトリエ事務所という小さな事務所に属する建築家という具合に分けるひとつの方法があって、それで言えば、私は、アトリエ事務所を主宰しています。ですからアトリエ事務所の建築家にはある共通した点があるとも思います。

私たちが日常的にやっている仕事は大きく分けて、どういう建物を建てたらよいか考えること、クライアントや実際に使う人々と打ち合わせしながらその構想を徐々にまとめていくこと、それを図面に表すこと、そして現場といって実際の敷地で建物がつくられていく過程を監理することです。構想をまとめていく過程、そして図面をつくり上げることは、自分たちだけではなく、構造設計、設備設計などほかのコンサルタントの人たちとの共同作業で、最近は、新しい技術に対応するために専門がより細分化していることもあって、多くのコンサルタントと共同することが増えてきています。つまり、設計のチームがプロジェクトごとにでき上がるわけですが、たとえば現在私たちは、前記の二つのコンサルタントのほかに外装コンサルタント、照明コンサルタント、デイライトコンサルタント、音響コンサルタント、防災コンサルタント、

コストコンサルタントなどの人たちと一緒にやっていて、プロジェクトによっては必要なシミュレーションによってもっとその数が増えたりします。それらをまとめ上げたり相互の調整をするには、相当量の情報交換や多くの打ち合わせが必要になります。現場に入れば、さらにそこに施工業者の人たちとの打ち合わせが加わります。

仕事を見つけることや、でき上がったものを発表することにも時間を使います。仕事を見つけるには、設計競技（コンペ）に参加する方法が一般的ですが、これはどれだけやっても勝てるという保証はないので相当ハードなものです。作品を発表するということは、写真を撮ってもらったり取材を受けるということですが、それは自分たちの考えたことをでき上がった時点でもう一度冷静に判断をするため、そして多くの人の意見を聞くため、そしてそれらを見てくれた人々から新しい仕事が発生する可能性があるからです。

さらに最近では、いろいろな領域が重なり合ってきているものですから、たとえば、家具デザインとか、プロダクトのデザインなどを依頼されたりもします。それから展覧会というものも相当数あります。自分たちの個展だけでなく、あるテーマのもとでのグループ展への参加、あるいはほかの人たちの展覧会の会場構成であったりします。

最近の特徴は、情報が世界中に広がっているので、仕事の依頼、あるいは設計競技参加の依頼、発表の依頼、講演の依頼が世界中に広がってきているということです。当然、国の数は外

国のほうが多いので、依頼は確率的には外国からの比重が高くなります。ここ二、三年、日本にいるのと外国にいる比率は、私の場合、二対一で、月にすれば約一、二回の海外出張ということになります。これはたぶん平均的なものよりはだいぶ多いと思います。このような状態がこの先も続くものなのかどうかは、まったくわかりません。私の場合で言えば、五、六年前から少しずつ増えてきて、現在はこれ以上は無理であろうというのが実感です。

このような状況を進めるための生活をたとえば先月を例にあげれば、月はじめに、二日パリで打ち合わせがあり二人のスタッフと出かけ、その後、ドイツの打ち合わせに寄って帰ってきました。一週間ぐらい日本にいて、一人でスペインでのグループ展のオープニングに出席して、小さなレクチャーをし、その後スタッフと合流してドイツでのプレゼンテーションに行きました。その同じ時期に、別な二人のスタッフが、スペインの別な場所で現在進んでいる仕事の打ち合わせに参加しており、また別な三人がアメリカのプロジェクトのために、ニューヨークに出張しておりました。日本にいた一週間のうち、二日間を金沢の現場ですごして、帰ってきて二、三日ほどで、もう一度、金沢に戻っています。金沢では、私たちにとっては、いままでで一番大規模の「金沢21世紀美術館」の工事が進んでおり、現在、二人が常駐、二人が週に三、四日出張、二、三人が東京の事務所でこの仕事に従事しながら進めています。

あとは、だいたい東京におりましたが、はじめに述べましたように、建物をつくるということは多くの人との共同作業のための打ち合わせがあり、さらには大学でも教えているので、日中は出かけることが多く、夕方から夜中が、スタッフの人たちとの打ち合わせや考える時間です。クライアント、施工業者の人たちを含めてじつに多くの人がかかわっているため、ほんとうにいろいろなトラブルがおきてなかなか大変なプロセスですが、それでもそういう過程を通して建物が実際にでき上がっていくことは大変面白いことでもあります。

ここで五、六年前のことを振り返ってみましょう。当時、共同通信で週一回五回ほど続けて配信された「しごとのデッサン」というコラムです。

コンペ

最近外国の仕事が増えている。といっても正確に言えば仕事ではなく、仕事の依頼に通じるかもしれないコンペ参加への呼びかけである。

この文章の依頼は、コンペのプレゼンテーションのためにオランダにいるときに、事務所からのファックスで知った。プレゼンテーションが終わってホテルに戻ってきたときであったので、出来不出来に関係なく妙に気分がリラックスしていて、得意でもないのに書くということをやってみようなどと思ってしまった。ただ、それから少し休憩して夕ご飯から帰ってくると、事態は思わぬことになっていた。

もともとこのコンペは、結果が一カ月後に出ることになっていた。今年の二月にもシカゴで

コンペに参加したのだが、次の日に落選のニュースを受け取ってしまい、ほんとうにがっくり来て、帰りの飛行機がつらかった。だから今回は結果が出るまで時間がかかるからよかったと思っていたのだが、またしても結果を知らされてしまったのである。

今回は落選しなかったのだが、二人が選ばれ、一カ月後をめざして再コンペをやることに決まったという。うれしいような、だけどあの過程をもう一度踏むのかと思うと憂鬱でもあり、でもこれで落ちていたらもっとがっくりだろうなどと複雑であった。

外国の仕事は、英語がしゃべれないから当然なのであるが、いろいろ日本と勝手が違って、ほんとうにコンペに勝ってしまったら大変だろうなという思いがどうしてもつきまとう。だから考えてみれば招待のファックスをもらったときが一番うれしい気がする。何かものすごくよい建物が考えられるのではないかという気持ちにさせられる。いままで一度だけ勝ったシドニー現代美術館のコンペでは結果を聞いて、うれしさより恐ろしさに襲われたのを覚えている。

つらいつらいと愚痴を言いながら案を考えている私に向かって、「それなら断ればいいんですよ」とスタッフに言われるのだが、たしかにと思いながら、なんとなくやってみたくもなるのである。（'98年10月20日）

締め切り

先週これを書いてからもう一週間が過ぎてしまった。一週間というものはあっという間に過

ぎるものだ、とつくづく思う。しかし設計の仕事はなかなか進まない。このあいだ苦しんでいると書いた再コンペの仕事は、一向に進んでいない。やってもやってもうまくいかない。締め切りの日が近づいているだけ余計に苦しくなった。

今週は別の締め切りも二つ抱えている。二つともやはりコンペで、うちひとつはこれもまた外国のものである。いくらなんでもそんなにコンペがあるわけではないのに、たまたま重なってしまった。

ナポリの近くにサレルノという小さな古い街がある。この旧市街をどのように再生するかという全体計画と、四つの古い建物の改築の提案が求められている。昔は修道院だった建物が、あるときから刑務所となり、現在は何にも使われないで放置されている。

日本ではほとんど考えるチャンスがないことであるから、面白いかなと気楽に招待を引き受けてしまった。そしていまはちょっと後悔している。そんなことばかりしているから、そんなに仕事があるわけでもないのに（コンペは非常に恵まれたケース以外は、仕事としては成立しない）、つまり貧乏なのに、事務所はめちゃくちゃ忙しくなってしまう。

ふと気がつくと、事務所を一人ではじめてからもう一〇年以上が過ぎた。昼夜の区別がないような、毎日が何か障害物競走のような生活も、最初はまだはじめたばかりだからしょうがないとなんとなく思っていたが、結局一〇年経っても何も変わっていないような気がする。最近では、そうするともしかすると、あと一〇年経って自分が五〇歳になっても、結局このままな

のかなあと、ふと心配になったりする。いや冷静に考えればそうにちがいない。
ではなぜ続けているのかといえば、やはり自分が考えたものが具体的なものになり、そして実際に使う人に喜んでもらえたときに非常にうれしく、ありがたい気持ちにさせてもらえるからだと思う。（,98年10月27日）

イメージ

なんとか二つのコンペの締め切りをクリアして少しほっとしたが、提出間際はすごい騒ぎだった。いざプリントアウトというときに、必ず何かトラブルがおこる。部分的に色がとんだり、データが重すぎて予定したように出てこなかったりする。調整しているだけでどんどん時間が過ぎていってしまう。
あと三、四日で最後の一つを提出して、一応ひと区切りつく。事務所内は、それに向けて妙な静けさが漂っている。早くゆっくり食事がしたい。
ファサードの設計をさせていただいた東京・銀座の店舗が一〇月のはじめにオープンしたのだが、なかなか評判がよいという手紙をクライアントの方からいただいた。そう言っていただけるとこちらとしては大変うれしい。
建築の設計はまだ見ることのできないものを頼んでいただくわけであるからなかなか難しい。図面や模型を使って何度も打ち合わせをするのだが、それでもでき上がったものを見ているわけではないので、最後に、自分の思い描いていたイメージと違うと言われてしまったらどうしようもない。それにイメージというものは微妙なことで大きく変わってしまったりする。
たまたま私は非常によいクライアントに恵まれていてそういうトラブルにはほとんど遭っていないが、けっこうつらい職業である。さらに最近は、いわばスペースの質、あるいは性能とでもいうものが、あるひとつの数値だけから判断されがちである。ある人のことを身長何センチで体重何キログラムだから大変よい人であるとは判断できないのと同じように、スペースの快適性もいろいろな要因の関係からでき上がってくると思うのだが、そういかないことが多くなってきている。
極論すれば、機械でコントロールしやすいものが一番よいということになってしまい、できるだけ予測のつかないものを排除し、どんどん重装備になってくる。もちろん限度はあるが、もう少しおおらかに、たくましく生活するということも楽しいのではないかと思うのは設計者の甘えだろうか。（,98年11月2日）

バランス

三日前についに最後のコンペ作品の提出を終え、事務所は通常の業務に戻った。送るのでは間に合わないので、スタッフの一人が急遽もって行くことになった。ほっとしてうれしいものの、異常な状態が長かったぶんだけ、逆に通常の状態に戻るのに少し時間が必要である。急に